

## 計測し制御する心臓リハビリテーションをめざして

第2回日本心臓リハビリテーション学会北陸支部地方会 会長

射水市民病院 麻野井 英次

第2回日本心臓リハビリテーション学会北陸支部地方会の開催にあたり、ご挨拶申し上げます。今日、急速な高齢化にともない心不全など心疾患患者の再入院が増加し、頻回の入院は患者に精神的・肉体的負担をかけるだけでなく、医療経済的にも大きな問題です。かかる社会的背景は医療の軸足を疾病の発症・増悪の抑制に向けさせ、一次・二次予防をめざす心臓リハビリテーションの推進エンジンとなっています。

本学会では、「計測し制御する心臓リハビリテーションをめざして」というテーマを掲げました。この10年間の心臓リハビリテーションのめざましい普及には、心臓リハビリテーションが持つ力、多くの会員の方々の努力、そして医療政策の変化が大きいと思います。今後、心臓リハビリテーションをさらに有効な医療に発展させるためには、画一的な運動だけでなく個々の患者の病態に即した対策が重要です。そのためには運動という最も複雑な生体システムの挙動とその変調のメカニズムを深く捉えなければなりません。運動中の血圧を規定する心拍出量の増加ひとつをとっても、心収縮予備力、前負荷予備力、後負荷（血管拡張）予備力、心拍増加予備力のどこが破綻しているのか、静脈還流に寄与する腹腔や皮膚血管床からの血液動員はどれくらいか、運動時の過剰換気は生理学的死腔、CO<sub>2</sub>化学反射や運動筋代謝・機械受容器反射あるいは肺機械受容器反射のどの異常によるのか、運動筋肉量や非運動筋との血流分配・酸素摂取能力はどれくらい低下しているのか、さらに運動時の中枢指令、動脈圧反射リセット、反射性交感神経制御は疾病によりどう変調しているのかなど、病態は多様です。最終的にこれらがどう統合されて目の前の患者の活動能に現れているのかなど、生体へのシステム生理学的アプローチが重要になってきます。運動中に計測できるパラメータは限られており、一方で「計測できないものは制御できない」というジレンマの下で、どこまで深く個別病態をとらえられるかが新たな発展への課題になると思います。

本学会では一般演題、教育講演、特別講演すべてを1会場で聴講できるようにいたしました。一般演題は28題、教育講演には大垣市民病院循環器部長の坪井英之先生に「重症心不全に対する非薬物療法」、大阪大学整形外科 健康スポーツ科学講座教授の中田研先生に「パワープレート<sup>®</sup>を用いた振動加速度刺激による運動器修復とパフォーマンス向上」、そして特別講演には富山大学第2内科絹川弘一郎先生に「CPX データを活かす心不全診療とは一重症例こそ負荷試験を一」と題して、臨床に直結するお話しをわかりやすくご講演いただきます。

本学会が心臓リハビリテーションに携わっている皆様の研鑽の場、情報交換の場となり、明日への臨床に役立つことを祈っております。多数のご参加をお待ちしております。